



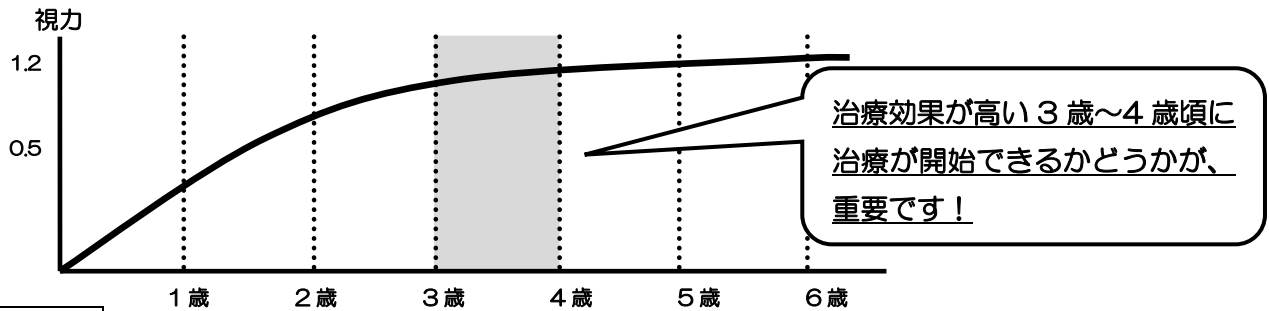
子どもの目について



子どもの視力の発達

生まれたばかりの赤ちゃんの目は、明るいか暗いかしか分かりません。その後、いろいろな物を見ることで視力は発達していきますが、視力の発達する時期は限られています。生後3か月～6ヶ月ぐらいまでに急激に発達し、**6歳頃には完成**します。

視力の発達には、「物を見る」ことがとても重要です。また、「両目で見る」ことによって物を立体的に捉えることができます。しかし、見えにくい状態が続くと視力は発達せず、「弱視」の状態となってしまいます。



弱視とは

眼鏡やコンタクトレンズで矯正しても視力が十分に上がらない状態のことをいいます。弱視は視力の発達の感受性期に片目または両目に適切な視覚刺激を受けることができず、視力の発達が止まったり遅れたりすることで起こります。

弱視は屈折異常や、斜視を早く見つけて、適切な治療を行うことで予防できます。

屈折検査でわかること

屈折検査（スポットビジョンスクリーナー使用）は、機械を使って測定する検査です。

屈折検査で測定できるのは、近視・遠視・乱視・不同視・斜視・瞳孔不同です。

※視力は測定できません。

種類	状態
近視	遠くははっきり見えないが、近くのもの見える状態。 網膜にきちんとピントを合わせることができればしっかりよく見えるが、近視は網膜より前でピントが合ってしまう状態。
遠視	近くも遠くも見えにくい状態をいい、網膜よりも後ろでピントが合っている状態。 また、軽い遠視であっても、乳幼児の場合は、内斜視（右目か左目のどちらかの視線が内側に向かっている状態）などを引き起こすことがあるため注意が必要。
乱視	近くも遠くもぼんやりして見えにくい状態。ものが二重に見えることもある。 目に入った光が角膜のゆがみのために、どこにもピントが合わない状態。
不同視	左右の屈折異常の程度が異なる状態。
斜視	目の視線が、見る目標に正しく向かない状態。両眼視機能や視力の発達を妨げることがある。
瞳孔不同	左右の瞳孔の大きさが違う状態。